

長畝ふるさと通信

【2018年8月号】

■ 佐渡米の挑戦は…こんなに暑いなんて…

8月に入っても雨は一向に降る気配すらなく、連日の猛暑に「田んぼの水不足」が心配されました。ダムの貯水量が警戒水域に達し、農業用水の送水量が制限されました。たださえ田んぼに水がないのに加えて取水制限までかけられ、川の水を田んぼに汲み上げる給水ポンプがバカ売れして、市も購入補助をするほどでした。幸い、長畝地区では深刻な水不足はなく、混乱もありませんでしたが…



島内に100ヶ所設置されたJAの展示圃に掲げられたのぼりには「日本一おいしさとみばえを兼ね備えた佐渡米の挑戦!!」とありますが、この異常気象は想定外でしょう。すでに新米の収穫が始まった新潟県柏崎では高温障害によって一等米比率が50%を割る状況で、これから収穫を迎える佐渡でも心配は尽きません。こればかりは収穫してみないとわからないのが現状です。

■ 英霊にもお願い

8月15日、戦没者慰霊祭に参列しました。地域の遺族会の役員さんも高齢化し、引き受け手がおらず、渋々役員を受ける羽目になったからです。正午の黙とうで先の戦争によって尊い命を捧げられた英霊にも、「どうか雨を降らせてください、美味しいお米ができますようにお力添えを…」と厚かましいお願いをした次第です。願いは届くのでしょうか。



■ WCS刈取・・・国の補助事業とはいえ、結構な投資です



で、エアコン完備でこの猛暑の中、オペレーターは快適に作業を進めていました。刈り取られた稲はコンバインの後部で円柱状に丸められ、お尻の部分から吐き出されます。次に専用のラッピングマシン(右写真)では発酵を促進する乳酸菌を投入し、



2年目を迎えたWCS(稲醗酵粗飼料)の刈取作業が8月上旬に行われました。今年からJA佐渡が専用のコンバインやラッピングマシンなどを買揃え、生産者組織に作業委託をして取り組むこととなりました。キャビン付きの専用コンバインは1台1000万円もするそう



ビニールでグルグル巻きにします。約2週間ほどで乳酸発酵し、飼料用として使えるそうです。1頭の牛が食べる飼料は月180kg程だそうで、これ1個で約1.5か月分の食糧になるとのことでした。ラッピングされたWCSは専用アームを取り付けたトラクターでトラックに積み、施設まで運搬されていきます。

■ 現地視察交流会



難しいご意見を頂きました。また、意見交換会では「納品している老人施設で、せっかくの美味しいおコメだからとプラスチックのお茶碗を陶器に変えてくれた」など、猛暑の苦勞を全部吹き飛ばしてしまうほどの激励のお言葉も頂きました。写真は翌日、観光案内した「佐渡の夫婦岩」です。夫婦岩といえば伊勢のものが有名ですが、佐渡の夫婦岩はその2倍もの大きさがあります。今回参加された2組のご夫婦もこの夫婦岩のように協力タッグを組んで日々お仕事をされていることでしょう。見習いたいと思います。

8月19日、今年も現地視察交流会を開催しました。今年は大阪、奈良、甲府、横浜、東京から5件のお米屋さんに参加してくださいました。うち2件はご夫婦、1件は姉妹で参加してくれました。

設備を更新したライスセンターを見学すると「将来を見据えた組合の覚悟がうかがえます」と有り



■ 塩沢にて…若きコメ職人に出会った



8月23日、トキの田んぼを守る会で新潟県塩沢市の「関 農場」を訪ねました。ここで生産されたお米は全国食味鑑定コンクールで毎年金賞を受賞する常連で、平成29年には東洋ライスがギネス認定された「世界最高米」の原料米にも選ばれた、まさに究極のお米だそうです。代表の関さんはまだ30代の若者ですが、お米づくりにかける情熱はお話をうかがうだけでも十分に伝わってきます。「食味値」と「味度値」は比例しない…他産地を自ら訪れ、その土地の気候や風土まで観察し独自の栽培技術を磨いてきたそうで、「自己完結で生産から販売まで全てやらなければ、この時代では生き残れない」という信念に満ちており、その探究心は大いに見習いたいものでした。

■ 大地の芸術祭にて

関農場で刺激を受けた後、十日町を中心に開催されている「大地の芸術祭」を覗いてきました。訪れたのは日本3大峡谷の「清津峡」です。往復1500メートルの長いトンネルの先には水鏡に映った絶景がありました。「インスタ映えスポット」というらしいのですが、



訪れた観光客は漏れなく写真撮影に没頭しています。ニュースでインスタ映えスポットへの不法侵入が問題視されていましたが、マナーを守らないのは外国人観光客ばかりではない様で、今の時代スマホの普及で「ながらスマホ」など新たな問題が発生していますがお手上げ状態ですよ、カエルさん。